
今この瞬間が未練だった

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今この瞬間が未練だった

【ZPDF】

Z0621Y

【作者名】

片岡

【あらすじ】

『彼と過ごす透明な日曜日』のもとになつたお話を
タイトルは素敵お題サイト様からお借りしました。

なんで此処にいるのって聞かれても、困る。僕はなんとなく此処にいるだけなんだから。

下校時間を迎えた学校を見て、そんなことを思つてみた。

正直、僕にも此処にいる理由なんてわからないんだ。だつて気付いたら此処にいたんだから。

だからといつて自分が死んだことに気が付いていないわけじゃない。未練も無い、はず。

本当に、此処にいる理由がわからないんだ。
生前は学校かつたりいなんて思つてたクチなんで学校大好き！つて理由で此処に留まつているわけでも、勿論、無い。

ふわふわ、ふわふわ浮きながら正門から学校を出ていこうとした。
……ああ、やっぱり出られない。どうしてだろう、僕はいつの間にか定位置
昇降口前に戻つてきていた。

だから、やつきの嘘になるんだな。なんとなく此処にいるんじゃなくて、出られないのが正解。

ああ、どうして僕は自由になれない？

僕には未練なんてない。

さつさと死後の世界とやらに行かせてくれよ。

一人ぶつぶつ愚痴つていると、不意に、ある女の子に目が止まつ

た。

校舎から慌てて出てきたその子が、やけに気になつた。

「…………きみ…………、」

「聞こえるはずもないのに、僕はその子に話しかけていた。聞こえるはずがないのに。

「え…………？」
「…………！」

視線が、ゆっくりと交わつた。
パリン、だなんて、境界線の砕け散る音が聞こえた気が、した。

境界線崩壊

（生死の境界線は壊れました）

温度を失くした

「僕が……、見えるのか……？」

「……」

彼女は僕の問いに戸惑いがちに頷いた。
そりやあそだう。彼女は、多分、僕のことを生身の人間だと
思つてゐる。

暗くなり始めた少し不気味な校舎を背に、いきなり（制服を着て
いるとはいへ）見知らぬ男に話しかけられて、意味不明なことを訊
ねられたんだ。僕がその立場にいてもそいつを怪しむ。
そんなことはわかつていた。

だけど、

「……」

だけど、そんなこと気にしてられないくらい、今の僕は興奮して
いた。
だつて、だつて初めてなんだ。僕が死んでから、僕に気付いてく
れた人は。

「あの……、誰ですか？そのネクタイの色、私の先輩……ですよね

？」

僕の学校は生徒がどの学年か一目ですぐわかるよう、学園別でネクタイの色を変えている。

しかし、先輩……？

……ああ、そうか。また巡ったのか。僕は高一で死んだ。学年色は縁。

そつか。今年は赤が一年生で縁が三年生か。

「ああ……、えっと、うん。そんなところかな」

正確に言えば、人生の先輩って感じだけど。なんだか煮え切らない返事を返した僕に、彼女はやっぱり訝しむ顔を崩さない。

「芽衣ーー！待つてよ、置いてかないで！」

暫く見つめ合っていると、彼女の友人と思しき少女が駆けてきた。彼女は、メイというのか。

「あ、ねえ、奈々。この先輩、知ってる？私、見たことないんだけど……、」

彼女は小声でナナちゃん？に話しかける。が、死んでから何故か

異様に発達した僕の聴覚では丸聞こえだ。

ナナちゃんは不思議そうに首を傾げ、虚空を見つめた。

残念、そつちに僕はいないんだな。

「……芽衣、何言つてゐるの？誰もいないじゃない。
変なこと言わないのでよーもづつ！怖いじやん！」

「つえ、……？」

暫し硬直していた彼女だが、すぐに口を開いた。

「な、奈々ここそ言つて……！」

「無駄だよ」

会話中に割つて入るのはなんだか緊張するけど、僕は敢えてメイちゃんに話しかけた。
すぐに僕のほうに振り向いたメイちゃんに、ナナちゃんが吃驚した顔をする。

「ナナちゃんに、僕の姿は見えないし、声すら聞こえやしない

手を差し伸べると、困惑しながらもメイちゃんは素直に僕の手を握ってくれた。

温度を失くした僕の手の感触に、少し気持ちが悪そうにしていたメイちゃんだけれど、次の僕の言葉に目を見開いて、掠れた声を吐

を出した。

「だつて、僕は死んでるか?」

温度を失くした

(この手に触れられるのは一瞬だけ)

温度を失くした（後書き）

色々矛盾点が見えてもあまり突っ込まないでやつて下さい

「……あの、」

「一人で喋つてると変な人だと思われるよ」

「つぐ……！」

僕の言葉に彼女は妙な呻き声を上げて押し黙つた、
まあ、現に通り過ぎる買い物帰りのおばさんとかが怪訝そうな顔
でメイちゃんを見ていたから黙るしかなかつたんだろうけど。
学校は薄暗かつたけど、帰り道は夕日が射して少し明るい。
夕日のせいだ赤みを差した顔でメイちゃんは僕をじとじと睨むよ
うに見上げた。

「あなたが、」

「あ、あの人、メイちゃんのことひしょく見てるよ。怪しまれてる
んじやない？」

そう言つとメイちゃんはパツと顔を前に戻して、独り言のようこ
僕に話し掛けた。

「あなたが幽霊だつていうのは、わかりました。それはわかつたけ
ど、どうして私についてくるんですか……？」

声から隠しきれない嫌悪感が溢れ出でている。

失礼な子だな、なんて思いながらその問いに答えた。

「ああ、知らない」

「知らないって……、自分のことじやないですか……。
はっ！もしかして私、とり憑かれた！…？」

「んなわけない、ない」

パシン、と思い切り頭を叩いてやつた。本当に失礼な子だな、この子。

結構痛かったのか、メイちゃんは涙目になつて僕を睨んだ。

「僕にだつて、人を選ぶ権利はあると思わないか？とり憑くんなら
もつと可愛い子選ぶつて」

「喧嘩売つてんですか……？」

「どうして私についてくるんですか！」

「だから、ついてくるんじゃなくて、引き摺られてるんだよ、君
に」

見て、と地面を指差す。メイちゃんは酷く驚いたらしく、ヒッ、
と小さな悲鳴を上げていた。

僕の指が指す先では、メイちゃんはの影と僕の身体（魂、と言つ
たほうが良いだろ？）が一部、一体となつていた。

「つな、なにつ、これ！や……やだ、やだ！」

「そんなに怯えられるとさすがに傷付くなあ……」

つーか、僕のほうが泣きたい。

なんだってこんな子についていかなくちゃならないんだか。だって、この子面倒臭そう。

パニックを起こす彼女をなんとか宥めずかして帰路を急ぐ。もう辺りはすっかり闇に包まれてしまった。

「…………」

さつきから、メイちゃんは全く話さなくなってしまった。気まずい沈黙を破つて、僕は敢えて口を開いた。

「僕も、半透明だろ？」

「…………そうだね」

何をいきなり、とでも言いたげな彼女の前に回り、目を合わせた。頬に触ると、一瞬重なった感触が伝わり、すぐにすり抜けた。驚きにメイちゃんは硬直した。

「つ、」

「僕を通して見る景色は、綺麗？」

「……わかんないよ、そんなの」

「うふ、ごめん」

いつの間にかとれた敬語は警戒を緩めてくれたのか、それとも敬語を使うに値する存在ではないと思われたのか。

どちらかなんて、わからないけれど、でも、それでも、もう少しだけこの優しい雰囲気に包まれていたかつた。

僕越しの景色は綺麗か

（濁つてみえたいつもの、いつもと違つ景色）

行方不明の心音

「どうせ、メイちゃんは僕がいる生活に最近やっと慣れてきたようだ。

慣れる、といつよりも僕にもメイちゃんにもビックリしようもないことだから諦めた、っていうほうが正しいのかもしれないけど。

今日も無事に一日が終わり、メイちゃんと一緒にメイちゃんの家に帰る。

メイちゃんは自室に入るなり機嫌が悪そうに僕を見た。

「あのせあ……、学校にいるときも話題に掛けるのやめてよ。反応しちゃって、また友達に変な目で見られたんだからね。

……って、知ってるか。ずっと傍にいたんだから」

メイちゃんは“ずっと”とこつ言葉を自棄に強調した。

「一ん、今日は本当に機嫌が悪そうだ。だけど、僕も伊達にメイちゃんと過ぐしてきていない。

メイちゃんが馬鹿みたいにお人好しだつていうのはわかっている。

「じめん、じめん。なんか、まだ死んだっていう実感がないんだよね……。

なんだか、じうじてメイちゃんと話せるから、自分がまだ生きてる

ような気がして……。

可笑しいね、『ごめんね』

眉を下げる、もう一度申し訳なさそうに『ごめん』と謝ると、ほり、君は僕よりももつと申し訳なさそうな顔で謝るんだ。

「『ごめん』。なんか、無神経だつた」
「ほんとメイちゃんつて扱いやすいよね」
「なつ……一ま、また騙したわね！？」

メイちゃんは顔を真っ赤にして僕を怒鳴りつけた。でも、今度はそんなに怒つていなくて、すぐに話し掛けてきた。

「ねえ、」
「なに？」
「……」

メイちゃんは黙り込んだ。

馬鹿だなあ、今更気を遣うことなんて何もないのに。
つづづく人を思いやるメイちゃんがなんだか可笑しい。

「言いづらい」と、別に良いよ。死因を訊かれようが何されようが、今更傷付かないから」

「……じゃあ、さ……、あんたってさ、……その、死んでるわけ、

でしょ？」

「そうだね」

特に変わった様子もなく普通に返事をした僕に、さっそく安心したらしく、さっきまでの何処かおどおどした口調は消え、いつものよう話し始めた。

「心臓の音って、聞こえるの？..？」

「.....え？」

思つてもみないことを訊かれた。

当たり前だ。誰が幽霊に“心臓の音するの？”なんて訊くんだ。
.....メイちゃんか。

「さあ.....、聞いてみる？」

「良じの？」

「うん」

そう呟つと、メイちゃんは僕の胸の辺りに頭をくつつけたり（と言つても本当にくつつけたら通り抜けちゃうから少し浮かせた感じで）、耳を澄ませた。

それから、何も言わなくなってしまったメイちゃんが気になつて、今度は僕から話しかけてみた。

「聞こえた?」

「…………冷たい」

「、うん」

僕の質問には答へず、メイちゃんはそれだけを口にした。やがて女の子らしい細い肩が震え出し、途切れ途切れに嗚咽が。

「つ何、も……、何も聞こえないよお…………つ…………」

「そつかあ」

何もメイちゃんが泣くことは無いだろう。

本当に、お人好しだな。

行方不明の心音

(耳を当ててもからっぽな心臓は)

繋ぐ手はない

「ねえ、今日、日曜だし、何処か遊びに行こう？」

「は……？」

「これなり何を言ひ出すんだから、この子は……。

「えつと……、メイちゃんつて、もしかして友達いないの？」

「いるよ……失礼な！」

「じゃあ、僕なんかじゃなくて生身の子と遊べば良いの……。

……あー、気い遣つてくれてるとか？

すると、メイちゃんは僕をキッと睨みつけた。

「私があんたと遊びたいから誘つてんのーーだから行くよーー。」

（やつ）最初から僕が何を言おうと行くと決めていたりして既に身支度を終えていたメイちゃんは部屋のドアを開け放ち駆け出した。

僕とメイちゃんは繋がっているので、僕に行く気がなかろうと僕は行くはめになる。

どうやら一体化してしまつたら主導権は生身の人間にあります、
幽靈である僕は基本的には逆らえない。

「良い天気だねーっ」

「そうだねー……」

……あのさあ、なんで公園?」

真つ青な空。白い雲。暖かな陽射しをくれる太陽に、古びて色褪せた幾つかの遊具。

メイちゃんの言つ通り、こんなにも良い天気だつてのに、公園で遊んでいる子供は一人もない。

それは、まだ九時という微妙な時間帯だからか、それともただ単にこの公園が寂れているだけなのか。

……多分、後者なのだろう。最近の子供は、外で遊ぶよりゲームだから。

誰にも使われなくなつて久しい滑り台には蜘蛛の巣が張つていた。人間の自分勝手な都合で作られたこの公園と遊具たちは、またしても人間の自分勝手な都合で消え逝くのだろう。

こういったものを見ると、自分の姿を重ねてしまい、酷く寂しい気持ちになる。

「別に、人がいなさそうな場所つて考えて、此処が一番に出てきただけ」

「ふうん、そっか

メイちゃんは懐かしそうに手を細めてベンチに腰かけた。足をぶらぶらとさせて、何処か遠くを見つめている。

「私が小さい頃、この公園でよく遊んでたんだよ

「なんだ

「うん。でも、小さい頃の

メイちゃんはじつと僕の目を見た。僕は、何故だかその視線にどうぞつとした。

「今じゃもう全然行かなくなっちゃって、想い出しそうになかった

つー、と細い指が何度もベンチの背凭れの上を行き来する。
その優しい手つきは、まるで憑圖り始めてしまった子供を宥めているようだった。

「昔は人がたくさんいたんだよ。
……時つてさ、怖いよね

全部、変わつていっちゃん。

メイちゃんは寂しそうに呟いた。

その姿が、あんまりにも頼りなさげで、寂しそうで、だからだと
思う。

だから、僕はおこがましくも実態を持たぬこの手でメイちゃんの
手を握ってしまったんだ。

それはすぐにすり抜けてしまったけれど、メイちゃんは少し驚い
たように、嬉しそうに笑つて言つた。

「……ね、もひどぎゅうつしてして

一瞬、僕は自分が生きている人間なのではないかと錯覚した。

繋ぐ手はない

(だつて、君が優しく笑うから)

地面を蹴れば空に行へから

ブ、ブブ、と虫の羽音のような耳障りな雑音が耳に痛い。
メイちゃんはまだ眠つてゐる。当たり前だ。今は朝の四時なんだ
から。

少し外が明るくなり始めた。カーテンを開けて、窓に顔と手を近
付けてみた。
陽の光に透かしてみると、LJの手の違和感は強くなる。

「じつじて、今頃……」

僕は、望んでない。

「ねえ、名前、なんてこのの？」

突然、メイちゃんは僕にそんなことを訊ねた。おつむ鶲鶲返しに呟く。

「名前？」

「さう。あなたは私の名前知ってるけど、私は知らないなって思つて」

ああ、そうだな。確かにそりや不公平だ。だけど、そう思つても僕には彼女に僕の名前を伝える術がない。

「……忘れた」
「……、え？」

聞こえなかつた、もしくは僕の言つた言葉を信じられなかつたのだろう。彼女は短く訊き返した。

「名前、忘れちやつたんだ」

メイちゃんは息を呑んだ。自嘲的に笑つて、続ける。

「可笑しいね。死んだ日や原因なんかは覚えてるよ。今から八年前、七月八日に僕はある十字路で交通事故に遭つて死んだんだ。こんな覚えていたくないことは覚えているのに、自分の名前と両親の顔だけが、どうしても思い出せない」

「…………」
「自分の存在が、思い出せない…………」

なんだか泣いてしまいたくなつて、思わず頭を抱え込んだ。メイちゃんの、静かな声が僕のあるはずがない鼓膜を震わせた。

「それは……、悲しいね」

「…………僕はさ、どうして此処にいるんだひづへ。」

メイちゃんは不思議そうに僕を見た。

僕でさえわからないのに、メイちゃんにわかるはずがない。

だけど、メイちゃんは必死に頭を捻つっていた。

「え、つと……、み、未練がある、から……？」
「違うよ、僕には未練なんてない。
僕、最近思つんだ」

「なに?」

「幽靈つて“未練があるから残る”んじやなくて、“未練があるから残りたい”んじやないかつて
「どつちも同じじじゃないの?」
「多分、ちょっと違う」

ふーん、とよくわかつてなさそうにメイちゃんはおざなりな返事をした。

そして、何かを思いついたように僕を見て、言った。

「あなたは、“未練があるから残りたい”の?」
「未練、無いって」

「あ……、や、そつか
「でも、もしかしたら自分でも知りないうちこの世に未練を持つ
ちやつてるのかもね」

メイちゃんは何かを考え込むように口を伏せた。とりあえず、何も言わずに待つてみる。

暫くすると、凄く小さな声でメイちゃんは呟つた。

「じゃあ、それがなくなつたら?」

「……地面を忘れたら、下に落ちるか、それか上に行へよ

そう、と寂しそうに呟いたメイちゃんの声が、やけに頭の中に響いた。

地面を忘れたら空に行くから

(忘れたら、それしか僕に出来ることはないだろ?~)

例えば、私に彼を繫ざとめる為の糸があつたとしたら、やつされば彼は此処に留まつてくれるのだろうか。

……地面みれんを忘れたら、下に落ちるか。それか上に行くよ

落ちるだなんて駄目。のぼっていってしまうのだつて許さない。

幽靈ゆうれいつて、“未練があるから残る”んじやなくて、“未練があるから残りたい”んじやないかつて

彼はそう言つた。

なら、未練を“残されば”良い。

忘れるひとなんて出来ないほどに、強い強い未練を残してしまえば良い。

だつて、そうすればあなたはもつと此処に留まつてくれるんじよう?

残つてしまえ。残つてしまえ。

なん、て、繫^{みれん}さひとめる糸もないのに。

繫^{みれん}さひとめる糸もないのに
(だけど、それでも繫いで、離^{はな}さないでおきたかった)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0621y/>

今この瞬間が未練だった

2011年10月31日17時15分発行